

雁かりを聞きく
(韋い応おう物ぶつ)

故園こえん渺びよう何處いず 歸思きし方まさ悠ゆう哉かな
淮南わいなん秋雨しゅうう夜よる 高齋こうさい聞き雁かり來きた

故園こえん 渺びようとして 何れいずの 処ところぞ

解説 韋応物が雁の囁き声を聞いて故郷を思つて作つた詩である。

歸思きし 方まさに 悠ゆうなる 哉かな

語釈 ※故園こえん||故郷。 ※渺びようはるかに遠いこと。 ※歸思きし故郷に帰りたい気持ち。 *悠哉ゆうざい思しう心の長くしてつきないこと。「悠々」という意と同じ。 ※淮南わいなん淮水の南。 ※高齋こうさい高殿にある書齋。 郡の太守(長官)の官舎の書齋。

淮南わいなん 秋雨しゅううの 夜よる

通釈 わが故郷長安はどこだろうと眺めるが、遙かに隔へつていて見えない。帰りたいと願ねがう気持ちが切々と迫り、つきない。この淮水の南の地で、秋雨がさびしく降りしきる夜、わが住む屋敷の書齋で雁の渡わたつて行く声を聞くと、いよいよ望郷の念がわき起こる。

高齋こうさい 雁かりの 來きたるを 聞きく